

七子氏へ御別れの言葉

つづえ

数少い吾々同人の仲間から殊に永い間、兄弟として来た兄を今遠く祖國へ送らねばならぬ事は、眞實に哀しいことあります。

妻り者の多い吾々の仲間の中でも殊にエッセントリックな性格の所有者である兄とは思想の上では御互に随分距離があり、時と場合には殆んど異った兩極端に立つこともありました。其れだけ吾々は敬へられる処が多いいであります。個性の尊重と成長、特にそつした方面で吾々は指導を享けました。

創造力……余りに多くの模倣に厭きた吾々の生活に最も必要とするものは、自己の個性より生み出すオリゲナリーターの培養であります。しつかりした個性を掘へよ。然して、後自己への建設に努めよ。斯れが黙々の中に兄から興へられつゝあつたものであります。解脱者の心境への到達。岐路は主観の

迷悟にあるとすれば自己への忠實な建設、其れが吾々の送らねばならぬ第一段であると思ひます。其の意味でも兄と吾々の身辺から失ふことは非常な痛事であり、各自異なるデステネーションを持つものが一生程共に在り度いと希ふことは、無理な希ひであらねばなりません。

御別れに望みて兄への餞けの言葉として、残された吾々は忠信に自己の建設に努むることを御約束申上ります。色々の計画と希望を以つて、故國の文壇へ再び歸へらるゝ兄の門出をいさゝか月並であります。すが御自愛專一にと祈つて、御別れの辞に代へます。

又會ふ日まで。

美都子
小部
彌生
方生
生

「アスタルエ」

美都 三

外國に古くから居る人達はよく「かへるく」と時どきの田圃の様にいふ。
西野氏のそれだと思つてゐた。
如がいよく、廿六日に……と、足もとから鳥が立つ様ふせわしなさ……いさ、か、啞然たるがらざるを得ない。
「ボツリ」と一言、くをゆつくり考へながら話す人。
「それは、かうふんずすよ。語尾に一すアウセントをつけて口を切り、それから三度の四度呼吸する間、とつくり熟考した後、本題に入る人。」
その間に、ツイツと相手の鼻の穴から、腹の中を覗き込んでゐる様にも思はれる。

秋に……心は火の水車場の
孕める妻がその、いひやう
こんなテリケイトを觀察を……うも
ふいあの人に、この歌がある。
矢張り談話の合の手に出来たものではな
らうか。
嘗て、時報紙の論壇を風靡した「吾相漫
言」のするどさも、此の間の獲物でかある
か。板板けりした寸評の利刃の様、切
れ味……抹茶をすく様、枯れ切った小説の

風味……さうしたものは、前にも後にも岡氏
をいって他に無かつた。由來、その人の書い
たものと、本人の性格の一致しない場合が、随分
あるものだから。果して西野氏に……?
自分には非常な、この疑向に對して興味を起
してゐたものだ。そして一昨年初めて會
つた時、西野氏もその一人であるといふ感さ殊
更に深かった。
あの猛烈な筆法を自由に駆使して、在
座の人間にあれだけ素晴らしいセンセーショ
ンを捲き起した西野氏が、會つて見ると
何時もニコニコとした人好きのする人で、話
し出せば、例の「それはいかふんずすよ」と未
だ、ゆつくり合の手、深呼吸が二三度入ら
うといふ。實際、慶島の人がいふより、
かえりかゝるがらう。
西野氏が今度、遠く日本に帰へられた如
く、無論、いつまでも我々の「同人」である
様にお約束された事だから、この後とも岡
氏の玉稿は本紙に現れるであらう。
たゞ、岡氏の温容には「又會ふ日まで」接する
ことが出来ぬ……それが自分にとつて残念
な境らふいのだ。
これだけ吾留小包といふわけにも、ゆくまゝいから
然し、似た様を、我々の中だ。そして「離者定會
といふこともあるまい。お別れの日、それは、か
ふんずすよ」と口を切り、又何時の日にか、本
題の續きを聞く事、出来る日を、楽しみに
にお待ちして、岡氏に「アスタルエ」を告げやう。

七子かうなへる

吾働きては歌ふ

三十をわれ三つ過ぎ
労働に心安けし
十月に入る

何かしら考へにつゝ生きいかふ
やゝ瘦せたれど
旅の十一年

七人の子らに巻かれ老にける
婦にてありし
今日未一写真

聲高の友が寝言に眼醒りにける
共同部屋
雨は戸を打つ

いれられぬ心抱きて
さりげなく
七月住みしこの友が部屋

この人も金を説くふりき
別れたる妻が癖ふと
話さ友かふ

社会主義者の吾と文やりに
返事せぬ娘の
嫁ぐ噂

公園に半日居りて
公園の設計師をば
罵るこゝろ

記者やめて編作する友もあり
春めく頃の
植民地かふ

月給日にや、近づく
煙草屋の窓の葉巻に
見入りけるかき

新聞の労働記事よ
燻らせる吾の葉巻の
いさゝか氣にふる

今日も亦働きけりと思ふほど
うす寝れりて
帰る夜の街
(一九二四・二・おんぶ誌第四号)

恋と幻想心

△私の恋

涯もなく
廣い海の上でした
お紐さまと
五子さまとの
船が行きあひました
しかし
ふたつの船は
永劫に
ふたつの港を待つてゐました

△白き幻想心

蠟燭のほし
夏明りを愛づる
夏夏の部屋
黙りの
影のたれるあたり
形ふきものの
血呪
夜毎闇に繁く
白き幻想心
(一九二七・一・二九
文藝所録 第三号)

秋の眸

別れゆく心はわびしく細りたる
さ指に夏の衣たむころ

マルボンの花にしるくさるる
雨申白晝の独り居にして

とふり家の女房が声のほーやせき
小春の朝の床のまどろみ

そのかみの薰造が繪の精ぶらうく
葡萄の秋の園に君立つ

垢越しに覗く子のありたわふる
實の一房を黄昏にやる

おほかたは實とふる夜ので、草の
晝の雨見も独り居にして

人の名もやに覚えし街の宵
て女が秋の眸の決き

ピアノの音に離れれて暗に
巻礼しるしビージヤカルメン

思ひ出は悲しきに去ぬ秋立し
ニッ田圃路の夜をすたく虫

秋にして心はたれ水車場の
乃子める妻が物の言ひ様

南場通一劇場の手でロー敷者を呼ぶ
女優の脂のやいと冷たし

サルミエントの夜 (一九二四、三〇
二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)

街燈の灯がけに咽ぶ死のタンゴ
ホサンが嘆きふるふ大セロ

小巴里に秋深みぬ去年の夜の
ボサンがクンゴエはや忘れず

汝が唄に酔ひける友りそきもの
かうな女房のホサンよかふし

そのかみのセビーヤの谷に捨てて来し
悪には屈れラーマスの瞳

脚光にニカおの環の短小とき
燃えし瞳よカスマンの謎

琴の盤にアイトライトの滴りせば
泣くはロメウの悪の精霊か

戻るさの雨の宿りの軒に見し
水菓子居の女房が口紅

初対面の七子氏

捨

小

アルゼンチンへ来て、随分色々の近かつきが出来たけれど、これ程僕の想像を見事に裏切った人はいない。
然しその見事に裏切られた想像が、かへって僕をこり上もしく愉快にして呉れた。
それは今年に日いつて、最初に到着するレコードを破った一月十二日、それも暑く盛りりの午後二時。セントロのKさんの店へ、いよいよこり入った所、いきなりKさんは、「君、七子さんがドローレスから出て来られて今、時報社に居られるマラダよ」と目鏡越しに余りたいた、御面相もさう僕の前を覗き込む。
「西野七子氏！ 未だ昨日にかつてはいないが、時報社や文藝附録では多々、お目に掛かっている。亜國に於ける邦人間唯一の小説家。いさゝか文學を生嗜つてゐる捨小舟、すつかり喜ばしくなりました。Kさんの店が閉まるのを待つて二人は、大急ぎで時報社へアラトを飛ばす。
「今日日……」勝手知ったる他人の家、ドレンくへって行く。方外生、Mさん、美都三、水戸大尉の諸兄としきりに、相談して居られる小柄な鼻の高い人が居る。すつかりこの方が七子さんだとは、神妙なる捨小舟、少しも知らなかった。何故なら七子さんと名前こそ、柔しいが、坂屋、駒屋の太男だとばかり思つてゐたもんだから……

「ア、この方が捨小舟さん？ 私、七子さん、七子さんで、捨小舟さん、よろしく……」
こゝに私の想像が、一に見事破壊されたわけだ。この方が七子さん、まさしく、驚いた。こんな柔らかならぬと、人の頭からよくも取れたワケの鋭い人の心に喰ひ入る様な文章が流れるものかと。さうして、その印象として私の頭に響いたのは、ゆつくりと、もうさう云はれる七子さん。そゝで、その一言一句に時々、ユーモアが流れる。と、その氣持のよい、方だと思ふことだ。自稱不へミアン捨小舟は七子さん、と初対面にすつかり、喜んでしまつた。その夜、七子さんと共に皆んな心から打とけて食事を共にした。私は私として尚更七子さんを好きになつてしまつた。葉巻をくゆらせながら、ボツボツと語る七子さん。ネマ通の七子さん。そして小説家としての七子さん。然し、今度ドローレスから出て来たのは、日本へ帰へるためだと聞いた時、私は全く失望した。十何年振りに故里の地を踏む七子さんの、爲めに、お喜ぶに申上ると同時に、亜國から去られる文人七子さんを、出送る事から引か、止めたい様な氣がした。
……と、とへ帰國されて、時々、御寄稿下さる事を知つて、幾分か、自分の心も慰められた。初め、お目に掛つた時は、不馴れの時……宗教的、不ふふふ、ふふふ、ふふふ、私、私、私、七子さんの、お福のために祈つた。



蜜の流る、地カナン

S 生

「のほりて度き善き地、甘き乳と蜜の流る、カナンの地」と目指してエジプトを離れて流れて来た古代エジプト移民にまつはるキリスト教史中最も興味あるエピソードの中心地カナンは黄河文明と蜜の關係ある支那の河南であらうと云ふことが、最近発掘された各種の古代遺物から推定して可成り明白になった。

河南省は政治上から見ても宗教上から見ても古代アッシリア、バビロンの文化に類似するが非常に古いエジプト人の大群が支那河南開封に居住して来た年代については異説紛々としていづれが真かその判断に迷ふ有様であるが各種の学説を綜合すると五万人のエジプト人バビロンにおいて歌謡すべき虚叙に遭遇した時代から、エルサレム城陥落後三十五年頃までの間であつたと思はれる。当時七十家族の大群が時の支那皇帝の懇篤なる保護を受け、迎へられたことは事実らしい。その事蹟について古代のものでは、マルコ・ポロの支那紀行文中間封におけるエジプト族は非常に繁栄して、当時エジプト教會堂の如きも堂々たるものがあつたと記されてある。

この事実が更に明白となつたのは、一五八三年がエジプト大徒使として北京に來たり、皇帝に初めて時計を献上し天文学、数学、科学、キリスト教を教へ、一六〇一年五十八才で傳道事業に一生を終つた、學識人格

共に深高にして當時の人々より生神様の如く崇拜されたマテオ・リッパによつて初めて判明した。リッパ自身が開封のエジプト人について記す所によれば、彼の研究の結果一六九九年当時の皇帝が同地のエジプト人のため教會堂を建立せざるのみならず一四八六年頃には皇室貴族の一部を出してエジプト教會堂を再建した事実とも一四八九年の日附の石碑によつて判明した。リッパ以後同じくエジプト教の宣教師等は一六三三年頃から引續き河南開封のエジプト人植民地の遺跡を探索し依然同地にエジプト教會が存在してゐたことが確實となつた。

エジプト人の人情風俗、生活状態等に関するものから、当時のエジプト教會に使用した舊約書の五書（即ちモーセの五書）をも保存してある。

この聖書は世界でも甚だ稀なもので、羊皮紙の巻物となり幅廿三吋、長さ七十呎以上、さすがに幾百年の星霜を経たものらしく書中無数に汚染の跡ある跡あり、或はちぎれかけた所を別の皮を綴つてその上に書き込み直しして修繕を加へ見るからに当時の禮教を疑難せしむるものありといふ。

なほ河政に開封のエジプト人部落が衰亡したかについて、支那の歴史を辿つて見ると開封は十七世紀の中頃には約百万の人口を有した中部支那における般盛を極めた美麗な市街であつたが、黄河流滅に位せるたの、これまでに十五回の洪水に襲はれ、大回の大火に見舞はれ、更に兵燹によつて破壊さる、事土間に及ぶ全く災禍の神に呪はれたる都の如くであつた。

殊に一六四二年黄河大氾濫のため堤防決潰して全市は殆んど濁流に吞まれて、二百家族のエジプト人の群は黄河北岸に避難せざるも当時逃げ遅れたる

多岐のユダヤ人は洪水に襲はれて溺死し、教會も流失し、幾百年が神の道と傳へたヘブライ語の聖典も流失した。
この大洪水の真中に漂流しつゝあつた聖書や教會に秘藏されてあつた教會史等を拾ひ上げた人々の遺字の姓名が詳細に記入された石碑が千六百六十二年に建立されたのが発見され、ア洪水の當時と思はしむるものがあつたと傳へてゐる。

古来支那にエジプト教や景教等が波及してゐたことは多くの人々の知つてゐるところであるがユダヤ教徒の群がキリスト教紀元前後に支那本土の河南開封に大移民を試みた事実は最近の歴史に発見された。
永年異境の生活を續けた彼等ははしく祖國の事と思ひ浮べたであらう。

しかし彼等が地方人から迫害を受けたとも思はれぬから、悠々の過去と永遠の將來と物語る大黄河の堤にひびきまづいてバビロンで彼等の祖先が鬱々たる柳の枝に琴をかいて「われら外邦にありて、いかむかエホバの歌をうたはんや」(詩篇百三十七卷)の悲しき思ひに慟みしや否やは秋葉の知らざる処である。
彼等は美はしき絹の織物と支那に未だ初めて打眺め驚いたことであらう。

又彼等は不可解の言葉を使用し、空の星の如く、海のままこの如く、数多き人々や全く異つた風俗人情を以て満たさる、市街の光景と打眺め、驚異の眼を見張つたことであらう。
されどエホバの命によつてこの國に留まるべきを信じてもゐたと思ふ。

彼等の子孫は支那語を學びたのに孔子の教理を授くる學校に通ひ、遂に彼等の教養は何時かは哀へ、偶像崇拜に對する不快、念もすらすら思はず知らず支那人に同化したのであらう。
一四八四年、日附ある石碑には彼等の子孫のあるものは全く支那がぶれて支那人の姓名も字を用ひてゐたユダヤ人のあつたことを明白に記してゐる。(未完)

この頃の歌 紅法師

病む故に倦しとぞ思ふ我が胸に今宵も時响音も降る。
病める身に凡悲歌とせ煩うてはほそりたる手に
寂しくもひとり歩めは曉にまほろむ姿今はなまらぬ人。
うすらは川原に夢路通はせと、心は水の流れにも驚く。

七子氏へ

七子氏送別子に 郵寄稿とお頼みして置いた。
てつ殊氏が突然二十二日本社を訪問された。
どうしても想がまとまらないうで、わざ／＼断りに来られたのだ。いろいろお話を伺ったけれど、それと私の筆でここに再録することは、てつ殊氏として御迷惑な事と思ひから有く、七子氏送別号であること、この為、郵寄稿中、テケレの里から本社を訪れて下さったとお事と書く日本に帰へられ七子氏にお報らせして置きたい。